

健康文化

## 美女と野獣

渡辺 美樹

リスニング教材としてディズニーの「美女と野獣 (Beauty and the Beast)」を用いることがある。映像の助けがある上に、お馴染みのおとぎ話なので英語の聞き取りが簡単になるからである。ミュージカル仕立てなので、聴覚障害のある人には楽器の音と重なるため英語がわかりにくくなるという欠点はあるが、楽しみながら学べるのは大きな長所である。アニメーション映画でありながらアカデミー賞にノミネートされたことからわかるように、これは大人にとって見ごたえのある映画である。

「美女と野獣」の物語は、世界中で広く語り継がれてきた。最も流布しているものはボーモン夫人の18世紀の版を基にしている。この民話は、民俗学的には動物花婿婚の一種（話型425の亜類型C）であるが、図像学的には「エロースとプシューケー」に相当する。このギリシャ神話と文学との関わりは、紀元2世紀にアプレニウスが『黄金の驢馬』で取り上げたのを嚆矢とする。これをテーマとする絵画・彫刻も数多いが、とりわけ新古典主義の時代にはプシューケーを訪れるアモールが好んで描かれた。アモールは熊やライオンといった野獣として描かれることが多い。ディズニーの野獣も角の生えたライオンとして描かれている。

ウォルト・ディズニーもこの民話に様々な変更を加えているが、不変的な要素は、女主人公ベル（フランス語で美女という意味）、その父と野獣からなる関係である。このテーマはエレクトラ・コンプレックスとして知られるものである。ベルのアニムス（女性の心に潜む永遠の男性像）が人間の男性ではなく野獣として示されるのは、父娘の一体感が強すぎるためだと考えられる。男やもめの父親に近親相姦的な愛情を抱くベルは、父親以外の男性を異性として受け入れられるほどには精神が成熟していないのである。近親相姦的な段階から脱却し、野獣に対する愛情をあるべき姿として認知できて初めてベルのアニムスは野獣から人間のレヴェルとなる。野獣の王子への変身はそれを象徴する。女主人公ベルの魂の成長を語った物語であるという点では、ディズニーの解釈も

これまでの解釈と何ら変わりはない。勿論テーマの提示の仕方はそれぞれに異なっているが。

ベルが父親離れしていないことは、ベルが父親と野獣の間を文字通り行き来することで表されている。村はずれに発明狂の（実用化されそうもない製品ばかり作っているためにクレイジー・モリスと揶揄される）父親と暮らすベルもまた「美人だけれどどこか変わっている」と村人に噂されている。彼女は村人との違いに気づき孤独感に悩まされているが、娘を溺愛する父親にはそれがわからず、美貌故にベルに関心を寄せる肉体美自慢のガストン（自慢屋という意味）との交際をそれとなく勧める。しかし読書と無縁のガストンはベルのお気に入りの本を二度も土足で踏みつけ、ベルの嫌悪感を助長させ、ベルはガストンの求婚を拒絶する。村一番の人気者のガストンは、変人というレッテル付きの父娘の孤立感に気づくことすらない。ハンサムなだけで中身のないガストンとの関係は近親相姦的な父娘関係を壊すものとはなり得ない。

ベルの読書癖は父親からの分離の道を準備するものとなっている。本の世界への憧れは、外の世界への憧れにつながる。ベルの愛読書はメタフィクション的に「美女と野獣」「蛙の王子」といった異類婚のおとぎ話である。つまり初めは「理想の男性(prince charming)」とは認識できない存在と出会い、その後結婚へと発展する物語である。ベルの結婚へと至る道、所謂アニムスの発達はこうした愛読書によって切り開かれる。読書の役割の重要性は野獣がベルへの愛情表現として図書室一杯の書籍を全てベルに贈呈するエピソードに表れている。

そもそもベルの読書癖というものは、中産階級的な美德を示すためにボーモン夫人が書き足したものである。社交界に憂き身を費やす二人の姉と対照的に、ベルは余暇をためになる本を読んで過ごす少女として描かれる。ボーモン夫人の想定していたためになる本とは、ディズニーのベルの愛読書とはかなりかけ離れたものだったと思われる。おそらくそれは宗教説話の類であろう。彼女はラクロの書簡体小説『危険な関係』が内包する道德観の欠如への批判としてこの物語を発表したとも伝えられるからだ。

読書の持つ現実逃避の傾向は古くから物語に取り上げられてきている。例えば、世界初の小説、セルバンティスの『ドン・キホーテ』においても、主人公キホーテは、騎士道物語（ロマンス）の読み過ぎによって気が変になって騎士遍歴の旅に出かけるのである。1752年のシャーロット・レノックスの小説、『女キホーテ』でも、ロマンスの読み過ぎでおかしくなった女主人公がその夢から覚めて道徳的に成長していく様が語られている。読書とは虚構をもって現

実の代用物とするもので、そうした物語の主人公は現実を虚構を通してしか認識することができず、現実社会に適応できない。ヴィクトリア朝的な道德観の下では女性がフィクションを読むことは道徳的墮落をもたらすものとして禁止されていた。読書を好む女性は女らしくないという理由で白眼視されたのである。20世紀の文豪サマセット・モームは自らの読書癖をアルコール依存症と同様の悪徳であるという。書痴とは一般大衆からかけ離れた奇人にほかならない。

ディズニーの主人公ベルが村人に変人と言われるのも、毎日の貸本屋通いとなって表れる読書癖のためである。読書という虚構の世界の住人であるベルが外の世界に触れて成長していくという点で、ベルの物語はキホーテの物語と対応する。しかしベルはキホーテが目覚めるようにその虚構の世界から目覚める必然性はない。虚構の世界の方が野獣の城として現実化し、野獣が王子へと変身するおとぎ話の女主人公だからである。虚構の世界からのベルの脱却はベルそのものの変化というよりも魔法の城の現実の城への変化で示されている。

発明狂の父親は蒸気自動薪割り機を市（フェア）に出品しようとして町に行く途中野獣の城に迷い込む。発明狂の父親の持つ読書好きのベルと共通する世間一般とのずれが魔法にかけられた野獣の城という非現実的な世界に彼を引きつけるのである。彼の「クレイジー・モリス」の部分が「からくり仕掛け」に見えるもの（実は魔法にかけられた城の住人や飼い犬）で一杯の城に引きつけられる。父親は城の主である野獣に不法侵入を咎められて囚われの身となる。

父親の危急を知ったベルは、野獣の城に赴き、病気の父の身代わりとして野獣の囚人となる。禁を破って野獣にかけられていた恐ろしい呪いを垣間見たベルは、震え上がって城を逃げ出すが、城の外でも獣性を象徴するオオカミの群に襲われる。ベルは追いかけてきた野獣に助けられる。肉体の美しさを誇るガストンとは逆に醜い野獣には知性と心の優しさがあることを知る。野獣の城に赴こうとして行き倒れになっている父親を野獣の魔法の鏡で見たベルは、父の許に戻る事を許される。野獣の呪いは彼が愛するベルにしか解くことができないものである。しかもそれが可能な時期はあと一両日しか残されていない。ベルの願いを優先して帰宅を許すのである。

一方、ガストンはベルに結婚を承諾させるため悪企みを巡らす。不思議な野獣との遭遇を語った父親を狂人として精神病院長に通報し、ベルに対しては結婚を承諾しない限り父親は収監されると脅迫する。ガストンは野獣とは逆に父娘の繋がり深さを悪用するのである。ベルは魔法の鏡を掲げて父親の話した

野獣が架空のものではないことを証明する。ベルの野獣への愛情を見抜いたガストンは、この恋敵を抹殺するために父娘を家に閉じ込めて、村人とともに魔法の城へと赴く。父の発明した自動薪割り機によって村から脱出できた父娘は彼らの後を追う。ベルが父親を選んだために呪いが解かれる望みを失った野獣はガストンに殺されてもいいと思っていた。しかし帰ってきたベルの姿を見てガストンに立ち向かう勇気を取り戻す。ガストンのために瀕死の重傷を負いながらも野獣は勝つ。息絶えなるとする野獣にベルが愛を告白した途端魔法が溶けて野獣は王子となる。ガストンの卑劣な行為はかえってベルの野獣への愛情を確固たるものにするのである。

野獣とガストンはベルを巡って対照的な行動をとる。野獣はベルに求愛できずにいたのに、ガストンは拒絶したベルを卑劣な手段を用いて手に入れようとする。野獣は見掛け倒しの冷酷な王子だったので、その罰として中身同様外見も醜くなったのである。外見と中身が一致しないガストンは、実は野獣に変身させられる前の王子ともいえる。野獣に変えられた王子は荒廃した開かずの間で一人絶望に苦しむうちに、同様に孤独に悩むベルを引きつけることとなったのである。野獣の孤独は彼一人が野蛮な動物であることでも示されている。飼い犬ですら「からくり仕掛け」のオットマンの姿をしているからだ。それに対して村一番の人気者ガストンは孤独の何たるかを知らない。ベルを射止めるには孤独の苦しみを味わい尽くしたことで心の成長を遂げた野獣となるのである。

ベルの父親に対する愛情は野獣を死へ導くが、一方でベルの意識していない野獣への愛情が野獣を生に連れ戻す。ガストンが死ぬとき、野獣としてのかつての王子は死に、統合された自己を表象する王子として蘇る。

以上見てきたように、この物語はベルの視点から見たベルの成長プロセスとして描かれている。しかしディズニーの映画は前置きを（それも題名が表示される前に）置くことで視点を複雑化している。静止画面を駆使した前置きでは、心ない王子が野獣に変えられた顛末を語る。また終末部でもスタンドグラス風の静止画面が再登場する。ベルの視点から語られる物語は入れ子構造になっている。内側の美女の物語を王子の物語が包み込んでいる。「美女と野獣」の題名は「野獣と美女」と逆にして読むべきなのである。

(名古屋大学助教授・言語文化部)